調査の目的と経緯

村木二郎

1. 調査に至る経緯と調査の目的

国立歴史民俗博物館では，2015 年度から 2017 年度の 3 年間で「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」と題する基盤研究を実施した。この研究にあたり，2014 年度から 4 年間の科学研究費助成事業（基盤研究（B））「琉球帝国と東アジア海域の動態研究―集落・流通・技術―」（JSBS26284091，研究代表者：村木二郎）も同時併行で進行しており，とくに現地調査に関しては科研費による成果が大きく反映している。共同研究にあたっては，文献史学，考古学，民俗学，分析化学ほか関連諸科学との学際的共同研究として実施した。

この研究は，文献史学が牽引してきた古琉球史を，文献資料の少ない八重山・宮古，奄美といった周辺の島々から描き直すことで，従来とは違った琉球の歴史を提起することを目的としている。すなわち，近世に琉球王府によって編纂された『中山世鑑』『中山世譜』『球陽』に書かれた歴史は，あくまでも琉球王府中心史観によったものであり，周辺の島々に関する記述は相当に割り引いて読まなければならない。『歴代宝案』のような外交文書や，『明実録』『朝鮮王朝実録』といった他国の文献資料などの同時代資料による分析が進み，中世琉球史研究は格段の進展を見せている。しかし，これらの資料には周辺の島々はほとんど登場することがないため，琉球王国本体の研究に比べて大きく取り残されているのが現状である。

ところで，オランダの文化人類学者であるコルネリウス・アウエハントが 20 世紀半ばに調査した八重山の波照間島には，社会的・宗教的諸相に色濃く中世の影が落ちているという（C. OUWEHAND『HATERUMA』榕樹書林，1985 年）。波照間では今なお中世陶磁器が採集でき，中世集落の廃村である石囲い集落遺跡のなかには，現在は聖地として祀られて大切に保存されているものも多い。かつて人類学者が対象としたこれらの素材は，まさに貴重な考古学的資料である。そして，その資料こそが琉球王国を相対化し，八重山・宮古・奄美を含めた中世琉球史の再考を迫る可能性を秘めていると考えた。

そこで本共同研究では，これらの遺跡・遺物の基礎的な資料収集を第一義にとらえ，既存の調査によるものだけでなく，本共同研究でもオリジナルなデータを作成することとした。

2. 調査の対象

波照間島に残る石囲い集落遺跡のひとつ，マシュク村跡遺跡は，現在も祭祀に使われる聖地であり，遺跡の中を神道が貫いている。この道は中世までさかのぼるものではなく，中世段階の集落は，

複数の石囲いが細胞状に連なって形成された屋敷地の集積体であり，集落の中には道をもたないのが特徴である。マシュク村跡遺跡は非常に良好な状態で保存されているため，かつて測量図を作成している。1993年度から1995年度に実施した，国立歴史民俗博物館の特定研究「列島内諸文化の相互交流の研究―奄美・沖縄の文化とその展開」（代表：朝岡康二）による成果で，その際には他に，竹富島の新里村遺跡，花城村跡遺跡，フージャヌクミ遺跡の測量図も作成している。

こういった細胞状集落遺跡は，八重山・宮古に広がる集落タイプであり，沖縄本島や奄美では見られない。まさにこの地域の独自性を雄弁に語る遺跡なのである。しかし，測量図が作成されているものはそう多くはない。そこで，本共同研究では資料の蓄積を図るべく，そうした遺跡の測量を実施することとした。限られた予算と時間内で実施するため，それほど規模が大きくなく，かつ残りのよい遺跡を選定するため，各地の遺跡を踏査したうえで，波照間島のミシュク村跡遺跡を平板測量することとした。ミシュク村跡遺跡は波照間島の北岸にあり，正面に西表島を見据える。波照間島に伝わる創世神話によると，波照間の祖先となったマラマリィヌパが誕生したのが北西海岸から砂丘をのぼったミシクと呼ばれる場所であり，まさしくこのミシュク村跡遺跡がそれに相当する。そういった由緒をもつ重要な村の遺跡なのである。このことも選定にあたって重要な要素であった。調査に関する詳細は，佐々木健策・小出麻友美・池谷初恵・小野正敏・村木二郎「沖縄県竹富町波照間島ミシュク村跡遺跡の調査」で報告する。

このような遺跡調査に対して，遺物の調査も重要である。八重山・宮古・奄美の遺跡からは膨大な量の遺物が出土する。なかでも青磁や白磁といった中国産陶磁器の量は圧倒的で，調査報告書が刊行されても全貌を知ることはできない。細胞状集落遺跡など沖縄本島で見られない八重山・宮古に特有の石囲い集落遺跡の年代を押さえるには，これらの遺物を分析するわけだが，とくに有力な手掛かりをなすのが中国産陶磁器である。中国産陶磁器は日本全国の中世遺跡から出土するもので，組成の違いはあるものの，八重山・宮古で出土する陶磁器もこれまで積み上げられてきた全国基準の分類で概ね対処できる。これにより遺跡の年代が導き出せるほか，博多を中心とした流通圏や，沖縄本島との異同を比較することで，八重山・宮古圏の性格も探ることができる。

そこで，発掘調査された良好な遺跡について，同じ分類基準ですべての中国産陶磁器片を分類・カウントすることとした。奄美地域では，喜界島の城久遺跡群大ウフ遺跡・手久津久遺跡群中増遺跡，宮古地域では，宮古島の住屋遺跡・ミヌズマ遺跡，八重山地域では，石垣島のフルスト原遺跡・竹富島の新里村遺跡の6つの集落遺跡である。そのほか，ジョージ・H・カー氏が1960～1962年にかけて先島諸島（八重山・宮古）で採集した資料なども，参考資料として併せて調査した。詳細については，池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・鈴木康之・村木二郎「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」で報告する。

宮古には，ミャーカと呼び慣わされている巨石墓が点在する。それらは中世にさかのぼる，地元有力者の墓という伝承を持つものが多く，なかには14世紀代とされるものもある。切石を組み合わせたこのような構造物が中世までさかのぼるのかどうかは，ミャーカを発掘調査して良いデータを得ることでしか結論は出ないであろう。本共同研究ではそこまでの調査は難しい。まずは基礎的資料を蓄積する必要があると感じ，図面化することにした。というのも，これまでミャーカの調査は単発的に実施されることはあったが，考古学的視点が欠けていたため正確な測量図すら作成されて

いなかったためである。切石の切り方や組み方，細部の加工にも注意しながら図面を作成し，ある程度の見通しを立てることができればよいと判断し，これらミャーカの調査も実施することとした。調査対象は，残存状態の良好なものを選び，宮古島久松ミャーカ群久貝ブサギ・松原ミャーカ，伊良部島スサビミャーカの３基について平板測量をおこなった。詳細については，久貝弥嗣・栗木崇「宮古島諸島地域における外囲を有する石組墓（ミャーカ）の調査」のなかで述べる。

（国立歴史民俗博物館研究部）